

「野のはな」ものがたり

—主婦たちの町おこし—



写真2: 世界一の透明度の水をたたえる龍泉洞



写真3: 「アトリエ野のはな」代表 坂本ゆりさん

村おこし、町おこしの掛けぐえが聞かれるようになって10年以上になる。むかしからの名所旧跡だけでなく全国どこに行っても、村おこし運動のなかで立てられた看板や地域振興の目的で売り出された特産品を目にする。いわゆるバブル経済が崩れた結果、廃墟と化したリゾートなどもある一方で、地域にしっかり根付いた町おこしはますます意気軒昂といっていだろう。そんな村や町の姿は、根っここのところ日本人を元気にさせる力をもっている。

今回縁あって取材した、岩手県岩泉町「ア

トリエ野のはな」の主婦たちはドライフラワーをリースなどを造って全国へ出荷し、それによって同時に元気の素も振りまいている。

日本のスイス

岩手県岩泉町はかつて日本のチベットと言われたこともある、山奥の閉ざされた町だったという。だが今はJR盛岡駅からバスで2時間半、ヨーロッパの田舎を想わせる清潔ですがすがしい、樹木の豊かなところだ。

越えるのがホネだった時代もあっただろう早坂峠の風景は、どこか宮沢賢治の世界を彷彿とさせる。高原の立木のむこうは『どんぐりと山猫』の山猫が、めんどな裁判するためにキノコ型の馬車に乗って飛んで来そうな青空だ。白い雲がぼっかり浮かんでいる。近くにある鍾乳洞・龍泉洞は日本一深い120メートルの地底湖を擁する。ここのお水はさぞかし美味しいだろう。

岩泉は広い。東京23区と横浜市がすっぽり入るくらいの土地に人口が約15000人。昔から酪農が盛んで（*1）、「南部牛追い唄」発祥の地といわれている。

町の入り口には「森と水のシンフォニー」という控えめな看板が立てられている。龍泉洞から流れてくる驚くほど透明感のある川のほとりに「アトリエ野のはな」の工房はある。この寒そうなモルタルの建物は昭和初期に建てられた土木事務所だったという。が、ものは考えようだ。スタッフの女性たちは「古い建物だからこそみんなで協力しあって改良し、暖かく居心地のいい場所にしてきた」、「おばけ屋敷といわれたところだから、余計に創造性が湧く」と愛着ぶりを口にする。

工房に一歩足を踏み入れると、天井にも棚にも壁にも床にも、所狭しと吊るされ掛けられ置

かれた、花、花、花、花……。ドライフラワーへと加工途上のもの、リースやバスケット、ブローチのような製品になろうとしているもの、出荷を待つ山のような花束、キルトのクッション、リバティプリントの手芸品、参考文献の書籍や写真集などなど。女子中高生ならずとも「きゃーかわいい！」と叫びたくなる。

花の館

この花の館の主、坂本ゆりさんは幅広い女性の心を魅了し、近隣の主婦たちとともに旧土木事務所を花一杯の工房「アトリエ野のはな」に変身させたバイタリティの持ち主だ。ゆりさんが15年前手掛けたムギワラギクのリースが岩泉町の産業祭で町長賞を受賞した時から、ここ岩泉でドライフラワー熱が巻き起こった。家庭学級でドライフラワー教室を開いたら、この住居の点在する町で120人もの女性が殺到した。そして折も折、中小企業庁の村おこし事業が盛んになっていた時期と重なって、女性による村おこしとして、このドライフラワーと草木染めの毛糸が地域の特産品になっていったのだった。当時を振り返ってゆりさんは「そのころは岩泉にあまり明るい話題がなかったところに、ドライフラワーという15年前にしては新しい世界を開いたみたいなのが評価されたんだと思います」と語る。

ゆりさんを中心に、10人前後の主婦たちがドライフラワーに取り組んでいる。皆パートタイムのかたちで、それぞれに自分の都合のいい時間にここに来る（*2）。手を忙しく動かしながらも、にぎやかなおしゃべりが続く。実に楽しげだ。手芸や手仕事の好きな女性なら、時のたつのを忘れるだろう。クリスマスの前などは、殺到する注文をさばくのが大変なようだ。



写真1: 「アトリエ野のはな」の工房



写真4:花で一杯の「アトリエ野のはな」工房の内部

しかしゆりさんははじめから、特産品にしようと思って花を作ったわけではない。ただ、小さいときから大好きだった花を作りたい、ただその一心だけだったのである。だが200年も続いた農家の嫁であるゆりさんに周囲の目は厳しいものだった。

花が作りたい

ゆりさんは東京新宿区で生まれ田園調布で育ち、普連土^{フレンツ}学園と恵泉女学園で園芸を学んだ。獣医であるご主人と北海道で12年間暮らした後、ご主人の郷里である岩泉町に移って来た。

ところがその当初は、友人もなくボツンと一人、あまりにも淋しい環境の中、身体がマヒして動けなくなるほど落ち込んでしまったという。「もともと楽天的な私ですが、当時はなぜか悪いことが続き、故里に帰って来たのにどうしてこんな目にあわなきゃいけないんだろうと思うと本当につらくて……。今思うと、自分は農家の嫁なんだから、ここに来たら、みんなの言うとおりにしなきゃいけないんだ、と自分で自分をがんじがらめにしていたのです」。

心から楽しく笑えなければ、精神的なストレスはたまる一方だ。「それは多分、女性は少女のころから夢を持って育っても、結婚して子育てをして、それに一生懸命になっている最中に、自分を見失ってしまうことがあるんですね。『私って一体誰なんだろう』と思うことが女性にはある。妻でもない母でもない嫁でもない、私って一体だあれと思った時、子供時代から培ってきた自分が出てくるんだと思います」と、ゆりさん。

ゆりさんは小さな時から花が大好きで園芸を勉強し、『赤毛のアン』のアン・シャーリーのようにならなくても夢を失わず、周囲を明るくしてき

たのだ。クヨクヨするよりニコニコしたほうが楽しいに決まっている。その時、実家のお母さんの、結婚へのはなむけの言葉「どんなに好きな人と結婚しても、結婚は生活なのよ。だから、自分の世界をもちなさい」という言葉がよみがえってきた。

当時岩泉には、閉ざされた山国では何をやっても駄目なんだ、という暗い雰囲気があった。また、いいお嫁さんとは野菜を作って現金収入を得るもの、という考えかたが根強くあり、花なんかゼイタク、と言われた。しかし、ゆりさんはどうしても花が作りたかったのだ。

ムギワラギク＝黄金の太陽

ゆりさんが選んだ花は、普連土学園時代の記憶の中に輝いていたムギワラギクという花だった。花に珪酸質が含まれていてカサカサ乾いており、摘み取っても色が全く変わらずキラキラ光っている。学名をヘリオクリッサム、意味は黄金の太陽という。ゆりさんは「黄金の太陽が冬も輝いていたら素敵だろうな」と思った。次第に、この花を特産品にしようという考えが頭をもたげてくる。「本当は花で遊んでいたいんだけど、農家の嫁がと許されない、なら仕事にしちゃおう」と。しかし周囲では誰も信じてはくれなかった。ゆりさんは一人でがんばって、東京の六本木の恵泉フラワースクールに10万本のムギワラギクを出荷する計画を立てた。もし失敗したら……。しかし、お姑さんは「失敗したら、また来年やればいいじゃない」と言って励ましてくれたという。

種を蒔いたのは山の上の水でもでないようなところだった。しかし、その年のムギワラギクの花は、もう二度とお目にかかれないうほど、それはそれはきれいに咲いた。近隣では「今度

来た嫁は草を植えているそうだ」などとウワサされたが、「いいじゃないか。うちは明治時代から草を植えている家だ（酪農家だから牧草を植えている）」と、お舅さんもかばってくれた。「今考えると不思議な気がします。でも、あの時わたしはよほどつらかったんだと思うんです。もう無我夢中だった」とゆりさん。周囲の愛情が注がれて、花というかたちに結実したのだろう。

それは誰もがびっくりするような大冒険であり、誰もがうらやむような大成功だったのだ。

新しい風土を創る

「アトリエ野のはな」の名は、新約聖書の『マタイ伝／山上の垂訓』の中の「野のはな（文語体では、ゆり）を見よ」から付けられたという。神は野のはなでさえあのように美しく装って下さるのだから、人間にそれ以上のことをして下さらないことがあろうか、だから明日を思い患ってはいけない、という意味だ。ゆりさんは、「わたし自身がクヨクヨして病気になったときに、自分の名前から、思い患っちゃいけないんだということに気がついて、自分を叱咤激励する意味でつけたんです」と笑う。

ゆりさんと10数人の主婦たちでスタートした工房は、必ずしも平坦な道を歩んだのではなかった。女性たちの集まりが、単なる趣味のグループに終わらず、13年も続いて来た秘訣はなんだろうか。「振り返れば、それはいろんなことがありました。結局、うちのメンバーはみんなそれぞれに平凡な主婦たちですけど、自分自身というものを持っています。出会いのなかで自分自身に気がついてきたのです。それは人間ですから時にはケンカもしますけれど、最後のところは信じ合い、助けあってきました。アトリ



写真5: 工芸館内の「アトリエ野のはな」コーナー



写真6: 新しく建てられた工芸館「ふるさと体験工房」の看板の後ろに植わっている花がムギワラギク

工野のはなのテーマは、仲よく、家族（花族）になることです」。

村おこしという、その土地に生まれ育った人でなければという考えが根強いものだ。しかしゆりさんは「アトリエ野のはなは、風の人と土の人とで作っているんです。私たちのように外から来た風の人と地元で生まれ育った土の人がともに新しい風土を創っていったということなんです」と語る。土地のものを大切にすると同時に、そこに新しい発想が加味されることが必要だ。例えば、松ぼっくりといえば、岩泉では薪としか思わないが、工房ではこれに、どんぐりやきれいなリボンをあしらって木の実のブローチを作っている。ラベンダーを縫いこんだリバティの布と松かさで作った「森のピンクッション」もヒット作だ。地元の人だけではなかなかカラを破れない。が一方、外の人だけが集まっても、地域に根付くとは思えない。

そういえば、宮沢賢治の『風の又三郎』の又三郎も、ドゥーと吹く風とともにやって来た。彼の存在がどれほど土地の子供たちの心をワクワクさせたことが。

ヒーリングプレイス（癒しの里）

一昨年からゆりさんは東京一岩泉間を数十回も往復した。子供の頃からかわいがってくれた二人の伯母さんが病に倒れ、一人は亡くなったためだ。仕事と介護に追われながら、ゆりさんの考えたことは「東京のほうが医療は進んでいるかも知れないが、岩泉のようにいい空気といい水があり、よく知っている人のそばで暮らすのが一番」だ。考えることは誰でも考えるかもしれないが、それをすぐ実行に移すのがゆりさん流か（?）。自宅の横にケアハウスを建てることにする。盛岡ケアハウスの所長さんらの協力

を得て、この春着工した。

いま、ガーデニングブームといわれ、ヘルマンヘッセの『庭仕事の愉しみ』（草心社）がベストセラーになっている。庭仕事・花づくりを通して瞑想し、自然のなかで心の底から癒されていく。ヘッセは「私たちの心が環境の姿をどんなにひどく加工し、変造し、というよりもむしろ修正してしまうものであるか。そして私たちの生活の思い出の姿がどんなに強く内面から影響を受けるものであるか……」「あるがままの自分自身、それが故郷だ。そこに幸福がある」と述べている。

岩泉でドライフラワーのクラフトづくりや他の手工芸が体験できる工芸館（写真6*3）の前には、あと2年がかりで、ハーブ園や市民農園ができる。花づくり、ドライフラワーづくりを一貫して体験できる体験ゾーンになるという。「自分でも癒されて、ここを訪れてくれた人たちもまた癒される場所ができるというのが一番嬉しい」とゆりさん。ゆりさんは自己回復を自分だけにとどめず、周囲の人々のために役立たせ、地域振興に大きく貢献している。「私たちはドライフラワーといわず、ドラマチックフラワーといっています。それは、これからのドラマをまだまだ続けていきたい、という思いを込めています。決して終わることのない花物語が続けられる場所。それにふさわしいのが岩泉だと思います」。

高齢化社会を迎え、村おこし運動は地域の高齢化対策抜きに考えられない。「これからは福祉の時代ですから、花をとおした高齢化社会の福祉というかたちをしっかりとみていかないと。これが私たちのテーマだと思っています」と語る。夢が夢に終わらず、地域の中でひとつひとつ形になっていく。

豊かな自然と人々の創意によって作られる、ヒーリングプレイス（癒しの里）には、多くの人を訪れる。一度訪れた人は、今度は自分の場所に持ち帰って種をまき、いつか花を咲かせる。そんな花があちこちで見られる日がきっと来るだろう。

*1

岩泉は日本の酪農発祥の地

*2

「アトリエ野のはな」の女性たちは20代～60代、総勢15人で、農園、工房、教室の三部門をこなしている。教室は、岩泉と盛岡の三ヶ所にある。

*3

木工、陶芸、ハムソーセージ作り、織物、手紡ぎ毛糸などが体験できる。